

日本語表現法における一提案

平 澤 洋 一*

A Proposal for Learning Japanese-Expression

HIRASAWA Yoich^{*}

The competence in 'Japanese-Expression' through which your own thought can be conveyed accurately and your interlocutor's intention can be grasped unequivocally as well. However, due to the fact that the 'Literature' in teaching at high school differs in its educational goal and contents, the seminar on 'Japanese-Expression Exercise' at university must start with, 'syllabus,' 'context,' 'medeia,' etc. That will scaffold the system and the discipline so as to hit the target. The basic plan of the system scaffolding lies in (1) learning the skill of 'Reading & Writing,' (2) analyzing to deliberate the given themes or writing, followed by expressing appropriately, (3) being open to any remarks given, (4) reflecting on one's feedback to improve one's own expressive power, (5) being ready to work on another, preceded by the appraisal given. This is, in a sense, a cyclic process, and it is critically important to effectively repeat it. Put into educational practice, though, it will demand too much devoted effort and too heavy a load of an instructor. The present paper addresses practice of *the learning aidsystem for Japanese-expressions* so that the instructor's burden can be relieved as much as possible, and its teaching method and skills can be systematized through electronic, communication technology.

Keywords: 日本語表現、支援システム、web作文、他者評価

Keywords: Japanese-Expression, Support System, Web Writing, evaluation

(* 城西大学 教授)

1 はじめに

大学生の入学時における日本語表現力の長期低落傾向になかなか歯止めがかからず、日本語表現法の授業でも教材と教授法の改善が必要になってきた。最近では1年次から専門科目の授業を増やし、全開講科目における専門科目の比率を高めていこうとする傾向が見られ始めている。それはそれで首肯できるが、それを実現化するには、(1) 教授科目群の体系的整備、(2) 教授陣の充実、(3) 学生の学力向上、(4) 授業の効率を最高にまで高める設備の拡充、(5) 経営面からの意識改革などの面で十分な手当てがなされていなければならない。(1) はどこの大学でもやっていることではあるが、卒業時にどのような学力をつけていけばよいのかという目標を学年全体および学生個々人について決定し、それを学生が「年次別授業計画書」に記入し、そのためのカリキュラム、教授スタッフ、教授法、教育設備などを教授側が充実させ、それを学生に徹底させなければならないし、計画が掛け声倒れに終わらぬよう、大学ないしは学部により3～6ヵ月ごとに専任教員のFDを実施し授業評価を行って学生の学力把握・満足度の測定などを怠らないよう気を配っていく必要がある。

学力を構成する重要要素としての「知識」と「学ぶ力」を養う一つの方法は、「読み」「考え」「書く」力を向上させることであり、その基礎となる「新しい語学教育」の体制確立が求められてくる。1年次の語学教育は、全学的な教育方針と各学部のそれとを複合化させつつ、個別授業での「教育目標」「教材」「教授法」「教授」「授業経営」に関する意識改革を進めていくことが望ましい。

ちょっとした工夫を加えて情報機器を授業に導入することによって、言語実態に近い形で学習者が要約文を作成したり、しっかりしたレポートを作成したりすることができるようになるし、「もの」を分類したり体系化したりすることもかなり容易になるのではなかろうか。情報機器は、創造力を高めたり表現力を豊に養ったりするのも活用できる。

- (1) 創造力を高めるためにリスティング法を利用する。
- (2) コミュニケーション構造を提示する。
- (3) それを取り巻く「情報」「文化」要素を提示してやる。
- (4) 言語生活環境を提示する。

このような面で情報機器を活用してやると、学習者は理解しやすくなる。「知識」が中心になってしまうと、教科の内容を伝えることはできても、「感動」させたり「想像」させたりすることは難しい。

2 何から改善していくか

国語表現法ないしは日本語表現法と名のつく先行研究は、決して少なくはない。例えば、清水幾太郎『論文の書き方』、国分一太郎『文章の書き方』、市川孝『新訂文章表現法』、塩田良平『文章の作り方』、平井昌夫『文章表現法』、樺島忠夫『文章作法』、今井文男『文章表現法大要』、森岡健二『文章構成法』、平井昌夫『文章上達法』、松村明『国語表現法』、木村時夫『事例小論文の書き方』、本田勝一『日本語の作文技術』、相原林司『文章表現の基礎的研究』、飛田良文編著『日本語文章表現法』、鹿島茂『勝つための論文の書き方』、橋本恵子『論理表現の方法』などがそれである。先行研究の研究対象はおおむね、

- ・表現命題の問題：主題、テーマ、モチーフ、視点……
- ・構成法：3部型、3部5段型、4部型、起承転結、4部8段型……
- ・表現技法：書き出しの手法、人物描写、場面描写、展開の手法、終結の手法、修辞法……
- ・関連分野：文体、発想法、思考法、コミュニケーション……

に大別できよう。小論文学習者の大半がはじめから出題者の意図とかけ離れた方向へ書き出していく教育現場の実情に鑑み、「表現命題」および「構成法」に力点を置いて小論文の骨格をしっかりと作り上げ、その上で内容を充実させ説得性・感得性を高めるための表現技法、さらには隣接科学の知恵を借りて「発想」「思考」「文体」「コミュニケーション」などに関することにも理解を深めるためのコンテンツを構築することができれば、学習支援システムとしても十分に機能していけるはずである。日本語表現法にかかわる分野のうち、本稿では小論文演習用の「構成法」について考察する。

3 論理説得型の構成法

3部型（序論—本論—結論）

書き手である学習者が自分の考えたことを正確で効果的に伝えるのに、どのような方法がとられてきたのか、そしてどのような問題があるのであろうか。構成法としては序論—本論—結論の構成（3部型）や起—承—転—結の構成（4部型）が広く知られているが、実際の文章では実にさまざまな構造と構成が見られるので、大雑把な構成要素を学習者に示して書かせるだけでは、教師が望むようなレベルで読み手に伝わる文章を作ることは難しい。

3部型に比べ4部型では、論理説得型の文章だけでなく情感感得型のそれにも多用され

るという特徴がある。しかしこれまでは、論説文や説明文には論理説得型の構成が適用され、文学的な文章には情感感得型の構成が使われるだけで、両者をうまく混合させたハイブリッド型のそれは稀であった。

読解や小論文指導などにおいて「序論—本論—結論」という構成がよくつかわれている。木村時夫（1979）は、こう説く⁽¹⁾。

序論は与えられた題目や資料を味読して（１）本論を展開するに際しての取り組み方を示し、（２）自分なりの問題点なり批判すべき点なりを見出し問題提起するものであり、本論は序論で提起した問題を裏づけあるいは実証するのに必要なデータを挙げ、論理的に配列して論旨を展開していくもの、結論は（１）序論の問題提起に照応するもの、（２）本論での論旨を踏まえたものであること。また、文章の分量は、序論を全体の20%、本論を60%、結論を20%にするのがよい。

序論は、小論文作成者が伝えたい話題や考えを伝えるための問題提起をする部分、というのが一般的な認識であろう。また、本論は事実・意見・理由などを展開させていく部分、結論は序論と本論の記述を受けての結論を提示する部分である。本論が文章の分量としては一番多くなるが、小論文なら200字で1項目というのが構成上のおおよそのメドにされることが多いようである。項目の配列順は、

- ・ 時間的配列
- ・ 空間的配列
- ・ 既知から未知への配列
- ・ 重要度に従った配列
- ・ 因果関係による配列

などが一般によく知られているところである。論理説得型の3部型基底構造の構成例を表1に示す。

この構成例は、通説と新説とを対立させた書き方である。この基底構造というのは、生

表1 論理説得型の3部型基底構造例

構成	働き	論理説得型の展開
序論	問題提起	先行学説の整理 本稿の立場と視点の明示 本稿で何を論じるのか
本論	事例 解釈 新説とその論拠	問題となる事象の紹介 通説による解釈、その限界 新説の提示（新規性を強く訴える）、その論拠／検証
結論	提言	結論にまとめ、汎用性を強調する

成文法でいうような「深層構造」の意味ではなく、本稿では「書き手の発想と思考に基づいた項目順を示す基盤的な構造」の意味で使う。この構造の項目順を部分変更したり文体や修辞法などでデコレートしたりしたものが「表層構造」となる。3部型のうち3部5段型は、情感感得型の文章や小説・舞台脚本においてよく用いられる構成法である。

4部型（起—承—転—結）

4部型は非常によく使われてきた構成法であり、その代表としての「起承転結」は、これまで（1）論理的な文章の構成を対象にする場合、（2）情感的な文章や作品を構成する場合、そして（3）ZK法⁽²⁾の創造性開発における「フェーズの変化」を論理展開として捉える場合に用いられてきた。

（1）の論理説得型の起承転結には表2のような構成がよく使われてきた。その構成法の発展的な構成法については第9節で、（2）は第4節の情感感得型の起承転結で、（3）は第5節で扱う。

（起承転合は）作詩法の一つ。詩の配列、構成についていう語。（中略）具体的には、「起」（提示）・「承」（発展）・「転」（転換）・「合」（帰結）の順序に従って、各句を配列する方法をいう。起承転結とも。（『国語学大辞典』212頁）

伝統的な修辞学においては、洋の東西を問わず、配列・構成の方法として、文章をいくつかの部分に分け、おれぞれに書くべき内容の順序が問題にされてきた。一般的によく用いられる「起承転結」や「序破急」などもそれぞれ、文章全体を四つないし三つの部分に分け、それぞれの部分の内容の相互関係を示している。原理的に言えば、文章はその内容の点からは全体的な主題を示す部分とそれを説明する部分の二つに分けられ、形式の点からは冒頭・中間・結尾の三つの部分に分けられる。従来の構成分類もこれらに基づいたものであり、たとえば「起承転結」は形式的には中間部分をさらに「承・

表2 論理説得型の4部型基底構造例

構成	働き	論理説得型の展開
起	問題提起	先行学説の整理 本稿の立場と視点の明示 本稿で何を論じるのか
承	事例 解釈	問題となる事象の紹介 通説による解釈、その限界
転	新説とその論拠	新説の提示（新規性を強く訴える） その論拠／検証例
結	提言	結論にまとめ、有効性と汎用性を強調する

転」の二つに分け、内容的には「結」が主題を述べる部分、その前の三つがそれを説明する部分に相当する。（『国語学研究事典』261頁）

橋本のトゥールミン・モデル法

橋本恵子（2006）は、英国の哲学者トゥールミンの提案した論議分析モデルを中心に、帰納法・演繹法・インドの五支論証法を参考にして考案したという「スピーチ構成図」による論理的表現を提案し、「導入」→「主張」→「理由」→「理由の裏づけ」→「反論」→「結論」の順に話せば、相手にとって分かりやすい流れで論を展開することが可能⁽³⁾と説く。この展開方法は、スピーチだけでなく小論文の作成にも有効な面をもっている。

牧野「議論の十字」

牧野の提案⁽⁴⁾はユニークである（図2）。十字形の縦軸に【文脈】【命題】【提言】を、横軸に【具体】【抽象】【命題】【論駁】【反論】を配置する。起承転結を進展させたい興味深い思考構造図であるが、もし【文脈】＝起、【具体】【抽象】＝承、【反論】【論駁】

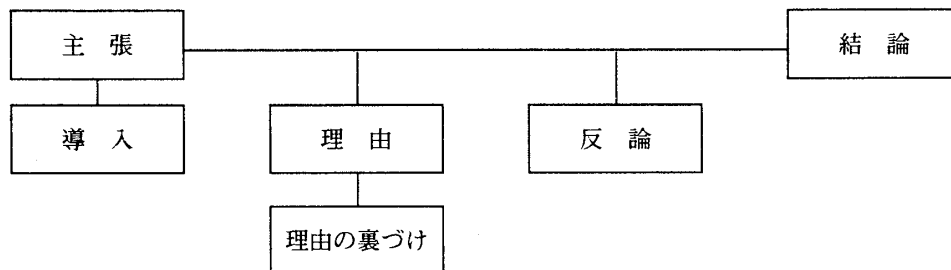


図1 橋本のスピーチ構成図

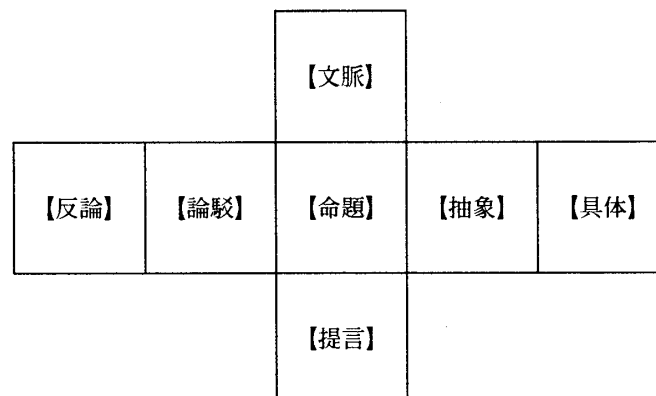


図2 牧野「議論の十字」の構成図

＝転、【提言】＝結、と解釈するのであれば、にわかには首肯しがたい。「起」を担うのが【文脈】ではなく、説得型の文章構成であるなら【問題提起】、感得型の作品構成であるなら【状況設定】が一般的であろう。また、【具体】【抽象】を「承」に限定するには無理があるのではないか。「承」の代表的な役目は説得型の文章であれば【検証】、感得型の文章であれば【事例／面白さ】なども可能であろう。

4 情感感得型の構成法

3部5段型

平井昌夫『文章上達法』⁽⁵⁾の示す「基本的な展開パターン」の提示と説明が分かりやすい。このパターンは3部5段の展開と解釈してよいだろう。長くなるが引用する。

書きはじめの「冒頭部」は、展開への導入部である。登場人物の性格が、端的な事態描写によって紹介される。あるいは、人物が登場し事件が展開することになる環境が、端的に描写される。もしくは、これから発展する事件の「発端」がいきなり描写されだす。そのような導入部によって、何か事件が起こりそうな予感や、事件がどうなるかという期待感を誘われるように工夫される。

「展開部」においては、そのような性格の人物が、そのような環境で、そのような性格の他の人物と、交渉をもつことによって、そのような事件が起こり、そのように「発展」していく。そして、そこに必然的に「危機」がおとずれて、人物の性格がぶつかり、事件が錯綜する。そうして「クライマックス」に達する。危機は、人物と環境のぶつかりによっても、もたらされるが、対照的な人物の性格・行動のぶつかりによって、危機がきわだたせられるばあいが多い。

書き終わりの「終結部」は、展開部をうけておさめる部分である。冒頭部でも、事件の発端からいきなり描写されだすばあいがあるのに対して、終結部でも、クライマッ

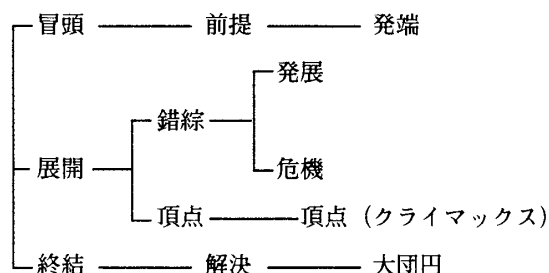


図3 3部5段の展開

クスが解決であり、「大団円」となっているばあいがある。また、未解決のまま書きとどめて、あとを読者の思量にまかせるばあいもある。クライマックスで解決されなればあいには、事態のなりゆきが見さだめられて、書きおさめられる。さらに、一見意外で必然的な後日談がつけ加えられて、書きおさめられるばあいもある。

同書は、プロットの種類として、12種の構成法を提示している。氏は文学的作品のプロットの種類として示したものであるが、Aは本稿でいう情感感得型の展開、Bは論理説得型の文章によく見られる展開型である。

A 主な「構成要素」の展開のさせかたに即した構成

(1) 主として、「事件」——変動する人物や事物の「動態」や「静態」の、展開のさせかたに即した構成

- ① 漸層型（漸増型）構成
- ② 漸降型（漸減型）構成
- ③ 急転型（反転型）構成
- ④ 回帰型（遡及型）構成

(2) 主として、「人物」の推移する「心情」や展開する「談話」の、展開のさせかたに即した構成

- ⑤ 情動型（心理型）構成
- ⑥ 談話型（会話型）構成

(3) 主として、展望され変容する「情景」や推移する「心象風景」の、展開のさせかたに即した構成

- ⑦ 叙景型（記事型）構成
- ⑧ 情調型（象徴型）構成

B 「話題」や「主題」の関連のさせかたに即した構成

(4) ※この項に対する名付け欠落

- ⑨ 連想型（類推型）構成
- ⑩ 対照型（対比型）構成
- ⑪ 重層型（複合型）構成
- ⑫ 連鎖型（連叙型）構成

⑫について氏は芥川龍之介『首が落ちた話』を例に、「いきなり重大な事態を提示して、異常に緊張させ、しだいに緊張がゆるむように、事態をほぐしていく、緊張度を漸減させる構成」と説明する。

⑧は「対象を描く」よりは「対象とはたらきかけあってかもしだされる情調（ムード）を、描こうとする象徴的表現においては、情調に即して心象風景が展開される」とする。小論文でも、「事例」や「話題」の挿入に際して、使い勝手のいい構成法である。

4部8段型

文章を八つの部分に分ける構成は、情感感得型の文章を作成するための手法の一つである。これを4部8段型と呼んでおきたい。この構成法は論理説得型の文章には不向きと考えられるが、転部のところに「読み手の心を打つ叙情的な表現」を配置する「論理説得型と情感感得型の混合型」を形成することによって、輝かしい生命を与えられるケースもありそうだ。

ドラマでは、構成がきわめて重要である。新井一『シナリオの基礎技術』（ダヴィッド社、1968）は、次のようなあらすじの構成例が紹介されている（番号は本稿での便宜的なもの）。我々がストーリーのある話を記述しようとする際にも非常に参考になる構成である。

起（発端）：(a)

承（展開／反テーマ）：承1=(b)、承2=(c)、承3=(d)、承4=(e)、承5=(f)

転（テーマ）：(g)

結（余韻）：(h)

この構成法を説明するには、新井一『シナリオの基礎技術』の「友だち」の例^⑥がもっとも分かりやすいと思われる。この構成例はテーマ「友情とは尊いものだ」、アンチテーマ「友情とは下らんものだ」を訴えるためのものである（段落記号は筆者による）。

(a)ある田舎の中学生の中に、友だちとの付き合いの嫌いな子供Aがいた。

(b)ある日、Aが数学の時間に答案を見せろといったのに、Bは見せてくれなかった。

Aは悪い成績に終わった。Aは友だちを信頼しなくなった。

(c)AはBとは付き合わなくなった。

(d)不良じみたCと付き合い、よく夜遊びをするようになった。

(e)Bはそれを心配して、何度か忠告した。逆にAは嫌がらせをしたり、Cと共に危機に落とし入れたりした。

(f)学校の遠足で、彼を困らせようとしたAは、かえって川に落ちてしまう。Bは泳げないのに川にとびこみ、Aを助けようとした。

(g)Bは溺れて死に、Aは助かった。

(h)Aは、今はなき友のため、白木の墓標に向かって慟哭するのだった。

表3 4部8段型情感感得文の構成

働き		情感感得型の展開
起	発端	背景や事情の描写 疑問性をもたせる、説明的にしない 新しさ、珍しさ
承1	反テーマ	事件1 球形人物・半球形人物・扁平型の人物をはっきりさせていく 疑問の魅力
承2	反テーマ	事件2 人間関係を明確にしていく（愛情型／利害型・見識型）
承3	反テーマ	事件3 徐々に「抜き差しならない」状況へ運んでいく
承4	反テーマ	事件4 「何とかならないのか」と心配させる
承5	反テーマ	事件5 危機感、切迫感
転	テーマ	最高潮 テーマを直接的なことばで表現してはならない 感動性を高める
結	余韻	感動性に余韻を持たせる 長く描かない

もう一例挙げよう。柳田国男の『遠野物語』である。(d)で非現実の世界に入り、それが(g)で一転して現実世界に入ることによって、三島由紀夫を感嘆させた「小説（物語）らしさ」が一気に吹き上げてくる。これが情感感得型の構成の力といえよう。

(a)佐々木氏の曾祖母年よりて死去せし時、棺に取納め親族の者集り来て其夜は一同座敷にて寝たり。(b)死者の娘にて乱心のため離縁せられたる婦人も亦其中に在りき。(c)喪の間は火の気を絶やすことを忌むが所の風なれば、祖母と母との二人のみは、大なる囲炉裏の両側に坐り、母人は傍に炭箆を置き、折々炭を継ぎてありしに、(d)ふと裏口より足音して来るものあるを見れば、亡くなりし老女なり。(e)平生腰かゝみて布物の裾の引きずるを、三角に取三角に取り上げて前に縫付けてありしが、まざまざとその通りにて、縞目にも目覚えあり。(f)あなやと思ふ間もなく、二人の女の坐れる炉の脇を通り行くとして、裾にて炭取にさはりしに、(g)丸き炭取りなればくるくるとまはりたり。母人は気丈の人なれば振り返りあとを見送りたいれば、親縁の人々の打臥したる座敷の方へ近より行くと思ふ程に、かの狂女のけたゝましき声にて、おばあさんが来たと叫びたり。(h)其餘の人々は比声に睡を覚し只打驚くばかりなりしと云えり。

上記(a)をプロローグとする4部8段型のプロットを展開することで、情感感得型の文章が書きやすくなることが多い。したがって、論理型小論文の事例・できごとを述べよう

とするとときに4部8段型のプロットを圧縮する形で論理方の文章に挿入してやることで、情感性がいくぶんたりとも盛り込めるのではないかと考える。

5 ZK法の起承転結

第3節(3)のZK法は、アイデアや発想がでてくる「心理過程」の問題と、アイデアがまとまるための「技術的」な問題の二つの側面を結合した創造性開発の技法であり、フェーズの変化として、

起=pre-creativity

承=personal data (個人による創造的思考)

転=group data (集団による現実的思考)

結=post-creativity

を担う起承転結のプロセスをもって創造性を高めようとするものである。「承」は創造的思考により結果を自由にどんどん出していく段階であり、展開された個人のさまざまな創造的思考の産物が「転」のところで寄せ集められると、一転して現実的思考に戻ってパーソナル・データを複合化・総合化するという起承転結であり、学会やビジネス社会のグループ会議や共同研究などにおいて威力を発揮する構成法である。

ZK法をとりあげたのは、小論文の作成において、何はともあれ「現実的思考」と「説得的な思考」を身につけてほしいと願うからである。片方善治先生の『発想学—創造性開発技法—』では、四つの思考法として①感覚的思考、②想像的思考、③現実的思考、④説得的思考を挙げ、新しい思考へ展開していくと指摘、この四つの思考を村上公克医学博士の「4脳説」に対応させて捉え、展開のステップとして①を「発想の視座」、②を「瞑想と思索」、③を「相対作用」、④を「実践への衝動」と名づけている。小論文の作成において学習者に十分活用してほしい思考法である。

①感覚的思考：現象に触れた驚きやよろこび、あるいは肌で感じる疑問、それらが発端となって生じる思考で、いわば感覚から生じる思考である。

②創造的思考：自由に想像の翼を伸ばし、現実から離れてイメージをふくらませる思考で、いわば想像から生じる思考である。

③現実的思考：アイデアを具体化したり、発想を実際化したりするための思考で、いわば実際化にむけた思考である。

④説得的思考：成果に対して自から質問と解答を反復しつつ、他に対して成果の内容を

説得できるようにする思考で、いわばQ&Aを前提にした説得的思考である。

ZK法の思考の起承転結にはパーソナル型とグループ型とを考慮しておく必要があり、パーソナル型起承転結においては「転」がパーソナル・データとなり、グループ型起承転結においては「転」がグループ・データとなる。ビジネスの世界にかぎらず人文科学系・自然科学系など広範な分野において、ZK法はきわめて有効性の高い展開法であると思われる。

6 言語面からの検討

以上見てきたような方法論の中に、もう少し掘り下げて考えるべき改善点がいくつか見え隠れする。これまで公刊された言語表現法関係の著書・論文は、文章の要約や構成、表現技法など言語表現法のすべての事項についての質的かつ実践的な研究が少なかったため、教師は教育現場で具体的な方法論を明示できなかったのではなかろうか。その当然の結果として、学習者がいざ書こうとする段階で何をどう書いていいか分らなくなる状態に追い込まれやすかった。

そのための改善法として提案するのが、(1) 論理性と情感性の結合、(2) 基底構造の設定、(3) Web上で展開するシステム、この3点である。

論理性と情感性の結合

4部8段型のところで示した情感感得型起承転結の「転」のところで物語は大きく転換する。テーマや情感が対立する内容なので、これを「 $A \leftrightarrow B$ 」⁽⁹⁾で記述すると、「 $A(d) \sim (f) \leftrightarrow B(g)$ 」となる。物語によっては「起 $A \leftrightarrow$ 承 B 」「起承 $A \leftrightarrow$ 転 B 」のような展開もある。この一方、対立ではなくて同内容ないしは類似内容に展開もあるので、これを「 $A \rightarrow A'$ 」「 $B \rightarrow B'$ 」などと表記することになると、「承 $B \rightarrow$ 結 B' 」のごとき展開も現われてくる。

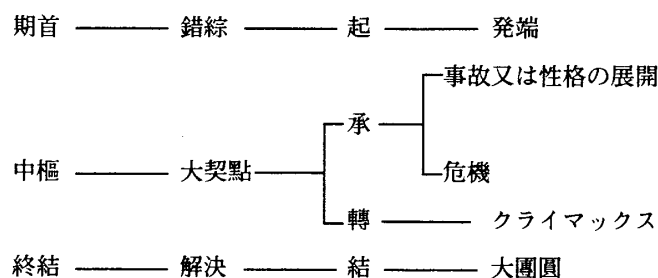
文章を八つの部分に分ける構成（4部8段型）は、情感感得型の文章を作成するための効果的な手法の一つである。この構成法は論理説得型の文章には不向きと考えられるが、転部のところに「読み手の心を打つ情感的な表現」を配置させて「論理説得型と情感感得型の混合型」を形成するならば、文章に光る部分を与え得るケースも少なくないはずである。本稿でのハイブリッド型の構成は、この点を重視した構成法である。

上記4部型の利点を活かしつつ、さらに1歩進めた文章構造を作成されることが望まし

文章の構造化

川端康成の3部5段型のプロットは図4に示したような展開となる(図4は原図の一部を罫線に変えた)。この3部5段の構成は、情感感得型の文章や文芸作品には使えるが、情感感得型の色彩を盛り込みたいとはいえ小論文の場合には、このままの展開というわけにはいかない。変形を考えるか、後出するようなハイブリッド型にするのがいいが、4部型の基底構造を基本パターンにするのが無難と思われる。

ストーリー（筋）は、云わばシナリオの最も原始的な形であり、シナリオ創作の基礎とはなり得ても、少なくともそのままの形ではその構成の基礎とはなり得ない。そ



14

れがシナリオ構成の第一段階へ踏みこむためには、ストーリーは先ず一つのプロット（はこび）としての「仕組み」を持たなければならない。（77、『決定版シナリオ構造論』124頁）

プロットが決定すると、次は愈々シナリオとしての構成（コンストラクション）にかかるのが順序であるが、これも実際の仕事の上からは、それほど厳密な区別は附けずに、プロットを決定することが直ちに構成を決定することに通じる場合が多い。（同書、132頁）

7 構造面からの検討

基底構造・表層構造を設定する

本稿でいう基底構造とは、小論文を展開していく場合の基盤となる論理的説得構造（論理で説得する場合の基底構造）と情感的感得構造（受け手の心に訴える基底構造）をいうこととし、そこには発想・思考の結果や感情が反映される。基底構造は、文章や作品を作成する者が発想・思考の深層レベルでの構造であり、それに推敲を加え順序などを変えて構成を変化させ伝達直前のレベルに達した構造を表層構造と呼ぶことにする。少しでもいいものを書くには、基底構造レベルで伝達効果の高い構造を形成しておくことが大切であり、基底構造には大別して「論理説得型」と「情感感得型」および両者の混合型（ハイブリッド型）を設定するのが効果的と思われる。どれをとるかで、生成される文章のコミュニケーション効果が違ってくる。

論理説得型の文章は、「序論→本論→結論」ないしは「起→承→転→結」の流れで展開されていくことが多いようだが、情感感得型では「起→承→転→結」またはそのやや複雑な展開型が一般的であり、大まかにいえば表4表5のような構造になろう。

「古き都に来て見れば（起）、あさちが原とぞあれにける（承）、月の光はくまなくて（転）、秋風のみがぞ身にはしむ（結）」（『平家物語』巻五、今様）はあまりに有名であるが、起

表4 論理説得型と情感感得型の構成差

構成			論理説得型	構成	情感感得型
序論	起		問題提起	起	プロローグ
本論	承		根拠・具体例	承	展開・危機
	転		反論・論破	転	クライマックス
結論	結		結論	結	エピローグ

表5 3部情感型の基底構造例

構成	働き	情感感得型の展開
起	発端	「序者、初めなれば本風の姿也」
承 転	反テーマ 事件 展開 テーマ	「序の本風、直に正しき体を細かなる方へ移しあらはす体なり」「破と申は、序を破りて、細やけて、色々を尽くす姿なり」
結	余韻	「急と申は、又その破を尽くす所の、名残の一体なり」

承転結の内容となると、これまでにいろいろな考え方が公にされ、衆知のように論戦はネット上にまで広がってきた。

しかし、構成の差異が最終的な文章に具体的にどのような影響を与えるのか、論理説得型の「起→承→転→結」と情感感得型の「起→承→転→結」にどんな素材をどう配置するかによってどのような文章の違いが生成されるかについては管見に入らない。

8 対立3部型の構成

3部型をとるにしろ4部型をとるにしろ、課題文のキーワードに対立させた自己キーワードを設定して履修者に書いてもらおうと、自由に書いてもらった場合より内容の濃い小論文の提出が多くなった。例を挙げて考察する。

次の小論文は、ある学生が書いたものである。そこには対立型を意識した構成が見受けられるが、対立語の使い方や論の構成などにまだ不十分な点がある。1000字以内で修正せよ。

「最近の新聞を読んで」

政治家の汚職事件が、このところ新聞を賑わしている。毎日のように、トップに新たな不正事実が報道されているのを見るにつけ、政治不信も深まってやりきれない気持ちになってしまう。

物価は上がり続け、政治家は私欲を肥やすために汚職をし、殺人や受験生の自殺に色どられれば、庶民の多くがうんざりするのも当然のことだろう。いったい、日本の将来はどうなるのかと案じたくもなるだろう。

国民の代表である国会議員が、平然と多額の金を私物にし、安閑とした顔をしていられる現状を見れば、社会の底辺が不審と怒りと不参で乱れていても当然のことなのかもしれない。表面の豊かな物質文明の裏に、もっともっと暗く陰湿なものが数多く隠されているのかと思うと、何だか背筋が寒くなるような思いがする。こうした思

いをいったいどこにぶつけるのか、やり場のないいら立ちを感じているのは庶民なのだ。

公害問題についても同じことがいえる。「新幹線公害」「水俣病」「大気汚染」など、豊かであるはずの社会についてまわるその裏の部分。企業側が頭を下げる回数と同じほどの人々が、理不尽な苦しみを負いながら死んでいったりする。無惨で、冷酷な文明である。

毎日、こんな報道ばかりに鼻つきあわされていると、時々新鮮なニュースを待ち焦がれるのも当然だろう。

近頃の新聞で、その新鮮なニュースのひとつとして、私の心をうった話題に「月見草」の話がある。「月見草」はなぜ夜咲くのか。その謎に20年間取り組んで、観察を続けた70歳の老婦人の話題である。老婦人が「月見草」の研究を始めた動機は、ある出版社から子供の理科観察ノートの批評を求められたことから始まった。批評するために自分で「月見草」を観察し始めるうちに20年たってしまったのだそうだ。単なる知識のつめこみだけに終わらず、長い年月をかけて、ひとつのことを成し遂げたその忍耐強さと真剣さには敬服すべきものがある。誰もが、いろんな思い出を持つ「月見草」。その「月見草」がなぜ夜咲くか、という単純な問いかけの中にそれを知ろうとする人の生きる姿勢の厳しさと純粹さが、私の心を強く打った。

文明、文化の華やかさのかげに埋もれてゆく純粹な疑問、真剣な姿勢。この婦人は、まるで暗雲垂れこめた世相の中に咲いた一輪の月見草のような存在である。私はこの話題にほっとするとともに、暗雲の深さと根深さに「月見草」が枯れることのないことを祈らずにはいられない。

(2002男子学生)

制限字数のある小論文（字数は600～1000字が多い）の場合、タイトルはつけないこと、「1000字以内で」という字数制限が付せられているのだから先ずはそれを守ることである。第3段落の5行を削ると字数制限内となる。内容的にも第2段落との重複が見られるので削除しても問題はない。

抄録文らしき文、主張したいことを含んだ文はなんとかうまく配置されているが、キーワードがうまく配置されていないという欠点がある。「表」「裏」という対立語を取り入れていれば、もっと論理性・説得性の高い文章が展開できたのではなかろうか。

対立語表現を用い、表と裏の関係が相対的・相互補完的であることを「視点の移動」で弁別しながら論じている点は評価できるが、第1段落と第3段落の記述が類似しているた

表6 基底構造入力例1

原文「最近の新聞を読んで」の構成			
部	キーワード	頻度	抄録文
1			いったい、日本の将来はどうなるのか。
2	月見草	6	表面の豊かな物質文明の裏に、もっともっと暗く陰湿なものが数多く隠されている。
			文明、文化の華やかさのかげに埋もれてゆく純粋な疑問、真剣な姿勢。
3	月見草	2	暗雲の深さと根深さに「月見草」が枯れることのないことを祈らずにはいられない。

め、内容が3段型の構成になっていない。

第1段落を「視点の移動で面が入れ替わらない事象」に絞って論じ、第2段落で「視点の移動で面が入れ替わる事象」を扱って、対立型の連結にするとよい。

基底構造表への入力

履修者にはまず表6の基底構造に入力してもらい、基底構造への入力が終わったら、構成を再検討し、予想抄録文の位置移動や段落の添削などをおこなって、論理が通るように工夫する。これが表層構造の重要な役目である。

課題に対し対立3段型で小論文を展開するには、(1)基底構造表に予想抄録文を入力し、(2)表現する段階(表層構造)では「述べる順序」(例えば帰納法、演繹法など)を換えながら基底構造表から自由にコピーして表層構造表に貼りつけていけばよい。

基底構造への入力が終わったら、構成を再検討し、予想抄録文の位置移動や段落の添削などをおこなって、論理が通るように工夫する。これが表層構造の重要な役目である。

課題に対し対立3段型で小論文を展開するには、(1)基底構造表に予想抄録文を入力し、(2)表現する段階(表層構造)では「述べる順序」(例えば帰納法、演繹法など)を換えながら基底構造表から自由にコピーして表層構造表に貼りつけていけばよい。

表層構造表への入力

表6をもとに、できるだけ本文を活かした修正を行うと次のようになる(下記文章の下線部は修正・補完した部分を示す)。ただし、表7から明らかなように、キーワード「表」「裏」がうまく配置されていないため、説得力の弱い小論文ができてしまっている。

修正例1

現代日本の表側は豊かで華やかである。道路網や住環境が近代化し、教育や医療の

表7 表層構造入力例1

「修正例1」抄録文の構成			
部	キーワード	頻度	抄録文
1	表 裏	1	現代日本の表側は豊かで華やかであるが、裏側には、暗く汚く貧しいものが隠されている。
		1	
2	表 裏	0	しかし、新鮮なニュースもある。
		0	「月見草」はなぜ夜咲くのか。その謎に20年間取り組んで観察を続けた老婦人がある。
3	表 裏	1	社会の表側は一見豊かで輝いて見えるが、その裏側には不正と貧しさがある。
		1	

施設が拡充され、余暇が増えて自由な時間に恵まれる。海外にも気軽に行けるようになった。少なくとも、見かけの幸せ度は増した。しかし、豊かと思われた社会の裏側には、暗く汚く貧しいものが隠されている。政治家の不正、公務員の犯罪、所得格差の拡大、生活環境の悪化、都市化による人間疎外、凶悪犯罪の増加……、目を覆うばかりである。

しかし、世の中捨てたものではない。新鮮なニュースもある。最近の新聞に「月見草」の話が載っていた。「月見草」はなぜ夜咲くのか。その謎に20年間取り組んで観察を続けたのが70歳の老婦人であった。観察は、ある出版社から子供の理科観察ノートの評判を求められたことから始まった。批評するために、「月見草」を観察するうちに20年たってしまったのだそうだ。単なる知識のつめこみだけに終わらず、長い年月をかけて、ひとつのことを成し遂げたのだ。文明、文化の華やかさのかげに埋もれてゆく純粋な疑問、真剣な姿勢。この婦人は、まるで暗雲垂れこめた世相の中に咲いた一輪の月見草のような存在である。私はこの話題にほっとするとともに、暗雲の深さと根深さに「月見草」が枯れることのないことを祈らずにはいられない。

社会の表側は一見豊かで輝いて見えるが、その裏側には不正と貧しさがある。政治や福祉の光が届かないのだ。これを他人事ですますことなく、真正面から見据えて行動していきたい。(656字)

修正例2

現代日本の表側は豊かで華やかである。道路網や住環境が近代化し、教育や医療の施設が拡充され、余暇が増えて自由な時間に恵まれる。海外にも気軽に行けるようになった。少なくとも、見かけの幸せ度は増した。しかし、豊かと思われた社会の裏側には、暗く汚く貧しいものが隠されている。政治家の不正、公務員の犯罪、所得格差の拡大、生活環境の悪化、都市化による人間疎外、凶悪犯罪の増加……、目を覆うばかりである。

かりである。

表と裏とは、もっと重く尊い関係を有していたのではなかったか。ドラマにおける表と裏、『赤穂浪士』の蔵之助と吉良上野介・柳沢吉保は、一方がオン・エアされている場面では他方は裏のドラマとして進行し、別のシーンではそれが逆になる。両者は対立しつつも補完しあいながら進展するのである。政治家の建前と本音の関係も同様である。建前は本音をカバーしながら本音を代表するが、公私の私を強調することで本音が表に現われる。国際経済にしても国民生活にしてもそうだ。表と裏が相対性をもつできごとは、社会にいくらでもある。ある本に、物事の表と裏は、両者が相俟って一つの存在を形成し、視点の移動で面が入れ替わる相対性をもつ、とあった。「現象と本質」「テキストと解釈」などは、視点が移動しても面の入れ替わることがないので、この点で表と裏とは異なる。表と裏は、相互補完的なのである。

大切なのは、表にせよ裏にせよ片方に偏ってはならないということだ。「人の行く裏に道あり。花の道」ということばもある。私たちは社会変化に即応した視点の移動により、物事の二面性、物事の真の姿を正確に捉える必要がある。そのためには、大学という恵まれた場において、より広く高度な学問と優れた人間性を身につけていく

表8 基底構造入力例2

「解答例2」抄録文の構成			
部	キーワード	頻度	予想抄録文
1	表	3	物事の表と裏とは、両者が相俟って一つの存在を形成し、視点の移動で面が入れ替わる相対性をもつ。
	裏	3	
2	表	4	表と裏は、対立し補完しあいながら進展する。 表と裏が相対性をもつできごとは、社会にいくらでもある。
	裏	3	
3	表	1	私たちは社会変化に即応した視点の移動により、物事の二面性、物事の真の姿を正確に捉える必要がある。
	裏	2	

表9 表層構造入力例2

「解答例2」抄録文の構成			
部	キーワード	頻度	予想抄録文
1	表	1	現代日本の表側は豊かで華やかである。 社会の裏側は、目を覆うばかりである。
	裏	1	
2	表	8	表と裏とは、もっと重く尊い関係を有していたのではなかったか。 物事の表と裏とは、両者が相俟って一つの存在を形成し、視点の移動で面が入れ替わる相対性をもつ。
	裏	7	
3	表	1	私たちは社会変化に即応した視点の移動により、物事の二面性物事の真の姿を正確に捉える必要がある。
	裏	2	

ことが大切である。(776字)

表8に比べると表9の第1部（本稿は第1段落の意で用いる）が「現代日本の表側は豊かで華やかである。」「社会の裏側は、目を覆うばかりである。」に、第2部が「表と裏とは、もっと重く尊い関係を有していたのではなかったか。」に書き換えられている。

修正例2は、キーワード「表」「裏」を頻度高く配置して論理性を保ち、「物事の表と裏とは、両者が相俟って一つの存在を形成し、視点の移動で面が入れ替わる相対性をもつ。」という知見を加えている点は評価できる。

9 ハイブリッド4部型の構成

ハイブリッド型というのは「論理説得型」と「情感感得型」とを混合させた構成を指し、論理説得型論理文の中の「事例」「話題」「引用部」「できごと」の紹介部分に情感型の一部を入れ込んだスタイルである。ハイブリッド型は4部構成を基本とし、テーマや材料によっては4部5段にも4部6段などにもなる。もちろん、情感感得型の文章や小作品の作成にも使うことができる。

【4部型表層構造実践例】

リライト文を作成するには、原文（小論文課題文）から必要と思う部分をコピーしてリライト文を完成させていけばいい。もちろん段落の順番を変えることは自由である。抄録文候補が揃ったら、取捨選択・修正しながら文章をリライトしていく。下掲リライト文の下線部は修正時に書き足した部分であり、リライト後の文章は対立4部型の構成になっている。

政治家の汚職事件が、毎日のように新聞を賑わしている。物価は上がり続け、殺人や自殺が後を絶たない。新聞の社会面だけが次から次へと新しい記事で埋まっていいものだろうか。政治も経済も社会も、その裏側には汚濁に満ちたものが幾層にも溜まってきた。戦後から走りずくめの社会の歪みが表面化してきた。

表面の豊かな物質文明の裏に暗く陰湿なものが数多く隠されている。問題なのは個人だけではない。企業の側にも社会全体にも責任がある。「新幹線公害」「水俣病」「大気汚染」など、豊かであるはずの社会についてまわる暗い裏の部分。企業が頭を下げる回数と同じだけの人々が、理不尽な苦しみを背負わされながら死んでいく。

「月見草」はなぜ夜咲くのか。その謎に20年間取り組んで、観察を続けた70歳の老

論理表現

起A	A3 課題把握 後も見ずに全力疾走、速すぎて魂を置き忘れたりしなければよいが、という意見は首肯できる。		B3 対置／課題への賛否 しかし、単純にゆっくりすれば解決できるのだろうか？		
承B	D1 問題提起 社会の変化が時の流れが速いので、このままでは身体感覚とのずれが限界を迎えるのではないかと。	E1 理由 現代人は時間への対処を変えるべき曲がり角にきたのではなかろうか。世界のグローバル化で世界共通の時間はより強固になったからだ。	F1 実証例	F2 教養・生活体験	C1 発想性 グローバルな時間はさらに速度を上げようとしている。
転B'	E3 説得 「古くから地球上には多様な時間が存在し」、それがかけがえのない地域社会を形成してきたのである。	B2 自己テーマ 時間が加速化する未来に向けて現代人が生き抜くには、相異なる二つの時間をもつことである。	E4 反論封じ 歴史学者の成田龍一氏がいうように「時間の個人化が進んだために、時間を共有することで成り立っていた国や社会のまとまりも崩れつつある」ので、そのことへの対処も必要だ。		
結B'	E5 段落のまとめ 今、時間を考え直すべき時期にきた。	E1 提言 世界に個別文化と普遍文化が存在するように、個別文化的・時局的な時間と、均でグローバルな時間が存在すべきである。			

図5 ハイブリッド4部型入力例（論理）

情感表現

起A	E5情景説明【起】		E5動機づけ 仕事に間に合わないからと専用ジェット機で飛びまわっていたビジネスマンが過労死してしまった。		
承A'	【承1】	【承2】	【承3】	【承4】	【承5】
転B	G3表現にパンチ力／【転】		G3感得表現 現代人は、原点に戻って生活時間を見つめ直さないと目眩への道を歩めることになる。		
結B'	【結】				

図6 ハイブリッド4部型入力例（情感）

婦人がある。我々は彼女の真摯な生き方に学ぶべきだ。夜間に道路の亀裂を点検する作業員がある。飛行機の機体整備を徹夜でする男たちがいる。長年の地道な仕事で社会の安全を下支えしている。人の行く裏に道あり。花の道。

文明、文化の華やかさのかげに埋もれてゆく純粋な疑問、真剣な姿勢。「月見草」を枯れさせてはならない。社会の裏側に光を当てた政治や社会活動の将来図を早急に実現化しなければならない。(616字)

ハイブリッド4部型基底構造の構成例を分かりやすく図にまとめると、図5、図6のようになる。課題文だけを与えて小論文を書かせるやり方に比べ、基底構造図を配布して「予想される抄録文」を書き入れてもらってから小論文にしていくプロセスをとったほうが、はるかに内容の優れたものになることが、ここ2年ほどの授業実践で分かった。

9 システム面からの検討

これまで見てきた教材の類を通年授業にたえうるように拡充してから日本語表現法学習支援システムに載せてみた。Webを用いるのは二つの理由による。

- (1) Webページをブラウズできる環境であれば新たにソフトウェアをローカルマシンにインストールする必要がないこと。
- (2) システム管理者が許可すれば、学習者が講義時間外にWebページにアクセスして学習内容を復習できるという利点がある。

Webでの授業は、教師がログインして「仮想教室」を作成した後、学生がIDとパスワードを用いてログインする。大学で言語表現法の良心的な授業を行おうとすると、

- (1) 「読み・書き」スキルを向上させる。
- (2) 与えられたテーマや文章の条件を分析・考慮して適切に表現する。小論文や章作品が完成したら送信する。
- (3) 自分の作成した小論文・小作品を評価基準に従って自己評価する（点数の記入）、送信。
- (4) 各学習者に2ファイルずつ送信されてくる他者の小論文・小作品に対し、評価表に点数を記入、送信。
- (5) 自分が作成した小論文や小作品について他者から評価が届く。
- (6) フィードバックされてきた他者評価の点数と自己評価のそれとを比較する。

というプロセスを効果的に繰り返し行うことが重要であり、それには日本語表現法の授業を担当するための教材の事前準備と授業後の採点および講評が必要となり、教師の献身的かつ過重な負担を求められるのが、従来の日本語表現法の授業であった。

これを実現するには、これまでの研究成果を踏まえつつ、自己評価・他者評価を活用した言語表現学習支援システムをWeb上に構築して、これまでとは違ったシステムティックな指導方法をコンピュータとネットワークを用いて実現することが欠かせない。

なにより助かるのは、講義を受けてから作成・提出した小論文の評価・成績（自己評価も他者評価も）が送信されてくるので、同一授業時間内に成績評価を教師も学習者も「閲覧できる」というメリットである。



注

- (1) 木村時夫『事例小論文の書き方』南雲堂、111－115頁、1979
- (2) 片方善治先生が提唱された創造性開発の技法。詳細は「創造性開発技法」『電子通信学会誌』第56巻6号、805頁、1973、および『発想学—創造性開発技法』システム開発センター、2002
- (3) 橋本恵子『論理表現の方法』創言社、55－56頁、2006
- (4) 牧野由香里「議論構築の動的モデル—RGBカラーモデルによる論理の多様性の表象」『関西大学総合情報学部紀要情報研究』第22号、143－175頁、2005
- (5) 平井昌夫『文章上達法』至文堂、1976
- (6) 新井一『シナリオの基礎技術』ダヴィッド社、51－52頁、1985
- (7) 学習技術研究会編著『知へのステップ—大学生からのスタディ・スキルズ—』くろしお出版、31－32頁による。
- (8) 鹿島茂『勝つための論文の書き方』文春新書、2003
- (9) 「 $A \leftrightarrow B$ 」「 $A \rightarrow A'$ 」は藤田修一先生のご発案である。
- (10) 川端康成『小説入門』要書房、65－66頁、1952年
- (11) 野田高梧『決定版シナリオ構造論』寶文館、125－126頁、1952